

金本敦志氏

特定非営利活動法人NPO birth
自然環境マネジメント部 次長

池の水ぜんぶ抜いて見えてくること ～都市から消えた自然を復活させる仕組みづくり

文／橋本かをり^{*1} 写真／吉竹めぐみ^{*2}

人の手が加わるからこそ、持続することが可能な自然環境がある。
生きものにやさしい都市にするために、関心を持つ人を増やし、つなぐ役割を自ら果たす。
(文中敬称略)

子どもたちに人気の 「池の水抜き番組」

テレビ東京の人気番組、「緊急SOS! 池の水ぜんぶ抜く大作戦」。かいぼりと呼ばれる水抜きを行い、底に何が潜んでいるのかを調査する。予期せぬ生物が大量発生していたなど、池の実態を暴くノンフィクションならではの興奮が視聴者を惹きつける。番組に出演し、かいぼりの講師役を務めたのが金本だ。

「今では普通の子どもが『外来種』という言葉を使うようになりました。この番組のおかげかも」と笑う。番組を見て、かいぼりの仕事がしたいと、金本が所属するNPO birthに入ってきた若者もいた。メディア出演は、自然環境保全を広く社会に浸透させる有効な手法だ、と気づかされた。

かいぼりは本来、池の底にたまった泥を取り除いて水質を保つもので、農閑期に村ぐるみで行われていた。生態系を維持するには3～5年ごとに行う必要があるという。NPO birthは、自然環境保全や環境教育の一環として2010年から、市民団体や研究者が行う井の頭公園などでのかいぼりを支援してきた実績がある。テレビ東京が番組化にあたり、かいぼりについて解説ができる数少ない団体として、声がかった。

「一般市民にわかりやすく説明できる人は、なかなかいないでしょう」。金本が番組で意識したのは、専門用語をできるだけ使わず、簡単な言葉に置き換えること。例えば昆虫の特徴を解説する時は、ついつい専門用語が飛び交いがちだ。ゲンゴロウの説明では、「足の先に毛が密集していて泳ぐのに適した構造になっている」というところを、「足の長い毛を舟のオールのように使って」といった言葉遣いをするだけで、ぐっと伝わりやすくなる。

かいぼり講師を引き受けた金本には、自分が感じる生きものの面白さをほかの人にもわかってほしい、わかってもらうことが生きものを守ることにつながる、という思いがある。共感の輪を広げ、自然環境を守ることに情熱をかける金本は、どんな人生を歩んできたのか。

目に見えぬ環境危機を 見える化する仕事

幼少期の金本は、並々ならぬ生きもの好きだった。「1歳くらいの頃、公園で突然うずくまって動かなくなった私を、親が心配して近づいたら、じっとアリの巣を見つめ続けていたのだからか」。

埼玉県出身で、小川でメダカを追い回し

たり、雑木林でカブトムシやクワガタを採ったりする日々を過ごす。自然を愛していた祖父は金本を、よく昆虫採集や釣りに連れ出した。

昆虫好きが高じて、大学では昆虫学を専攻。4年間かけて、ルリクワガタという青緑色に光る小さなクワガタの仲間を研究する。標高1000メートル以上のブナ林にしか生息していない種だ。「何を食べているかもよくわかっていないような、ほとんど生態が解明されていない昆虫なんです」と、うれしそうに金本は話す。研究室にこもっての研究より、自然の中を通うフィールドワークが肌に合った。この頃から、フィー



大学時代の研究内容が掲載された雑誌(有)むし社刊「月刊むし」2007年9月増刊号「BE-KUWA No.24」より



金本敦志 Atsushi Kanemoto

1980年、石川県生まれ。東京農業大学農学部農学科卒業。2007年、東京環境工科専門学校野生生物調査科を卒業し、栃木県内の自然体験施設に勤務、自然環境調査などに従事。2013年、特定非営利活動法人NPO birthに加わり、都立公園の指定管理事業、環境教育、各市町村の自然環境調査事業普及啓発事業、テレビ番組制作協力などに従事、現在に至る。1級ビオトープ施工管理士、1級ビオトープ計画管理士。学芸員。専門家としてテレビ東京「緊急SOS!池の水ぜんぶ抜く大作戦」、フジテレビ「坂上どうぶつ王国」、TBSテレビ「四季折々の贈り物」などに出演中。

^{*1} 株式会社グローバルメディア ^{*2} 写真家



ルドワークを軸にした環境の仕事に就きたい、と考えるようになる。

大学を卒業し、ホームセンターで2年間仕事をして、専門学校で学び直すための資金を貯めた。フィールドワーク職に就くには、生物の調査法や解析法、環境教育などの実技を学ぶ必要があったからだ。そして専門学校を出た後、栃木県の里山にある自然体験施設に入職。子どもたちをガイドしたり、キャンプをコーディネートしたりする仕事に没頭した。

そんな金本の人生に、転機が訪れる。2011年の東日本大震災の後、埼玉の実家は大丈夫かと不安になって帰郷すると、昔の自然が一変していた。追いかけて回したメダカやカエルが、姿を消している。「学生で帰省したときは、まだメダカは泳いでいたのに」。豊かな里山に身を置き、好きな仕事をしていた金本だったが、このわずかな数年で、生まれ育った地の自然が危機に陥っていることを知る。自分がなんとかしなければ、と思った。

メダカが消えたのは、農業の担い手不足に由来していた。農家が廃業し、生息地である田んぼが減った。それだけでなく、管理のしやすさを優先せざるを得なくなり、用水路がコンクリートで固められることで、緩やかな水辺の移り変わりが失われ、生態系が壊れてしまっていた。田んぼだけではなく、雑木林やため池、草むらといった、人と関わり続けてきた自然が、農業従事者の減少や人々の生活様式の変化によ

て姿を消しつつある。「この事実を広めていくこと、それを仕事にしよう」。心に誓った金本は2013年、NPO birthの門を叩き、現在に至っている。

生きものが再び戻ってくる喜び

NPO birthの活動の軸は、自然を守ることと、そのために地域の人の輪をつくること、の2つだ。公園の指定管理事業の中では、緑の保全管理から、生態系の調査、それをもとにした保全計画の作成、学校の子どもたちをはじめとする来園者への自然ガイド、公園でのイベントのコーディネートといった仕事もあり、多岐にわたる。その中で、1級ピオトープ管理士などの資格を持つ金本は、公園の自然環境維持に関する指導、ガイドラインの作成などを受け持っている。

ピオトープという、人工的な小さな箱庭のような自然を思い浮かべる人がいるかもしれない。しかし、本来のピオトープとは、ドイツ語で生物を意味する「ピオ」と、空間を意味する「トープ」を組み合わせた造語。動植物の生息・生育空間という意味になる。「広義では、生きものさえいれどどこでもピオトープなのです」。

ピオトープ管理士の役目は、そのピオトープに合った計画をつくり、適切な手入れをすることだ。例えば鎮守の森をイメージした明治神宮。自然の移り変わりに任せ、100年も前から大きく手をつけることはしな

い、というのも、ひとつのあり方だ。一方、金本が本拠地のひとつとしている都立武蔵国分寺公園のような、雑木林。「人が利用することで、自然の移り変わりである『遷移』という動きを止めて循環させる、人が強く関わり続けている自然環境、と言えるかもしれません」。

火山の噴火などで何もなくなくなった自然の荒地は、やがてコケが生え、草が茂って原っぱになり、木が育ち、落葉広葉樹林に変化していく。関東地方では、最終的には常緑樹林になる。落葉広葉樹林のタイミングで人間が木を伐って薪や炭にし、落ち葉を肥料にして使う。それを繰り返していくのが雑木林だ。コナラやクスギなどの落葉広葉樹は伐られても根が生きていれば、そこから芽吹く萌芽更新をしやすい性質がある。20年程度のサイクルで若返らせることで、持続可能となる。

昔は、伐った木や集めた落ち葉は生活の中での燃料や、農業を営む中で使っていたが、今は、もらい手がどんどん減っている。人の手が入らなくなった雑木林は、荒れていく一方だ。

「かつてのような継続した手入れを維持していくため、住民や学校、企業など地域と一緒に取り組んでいきたい。手を入れれば入れただけ、雑木林やため池は応えてくれますから」。いったん姿を消した生きものが戻ってきたり、これまで生息していなかった場所に新たな生きものが見られたり、という成果が出たときが、金本にとって大きなやりがいを感じる瞬間だ。

人と人をつなぎ win-winの関係をつくる

合意形成も、自然環境保全には欠かせない。金本がこれまで携わった仕事のひと

つの成果が、2019年の「都立浅間山公園保全管理ガイドライン」だ。都立浅間山公園は府中市にある約8ヘクタールの雑木林で、希少種や絶滅危惧種が多く生息している。この公園の環境保全を志す団体はいくつかあったものの、団体間で保全方針に関する意見がまとまっていない状況だった。

ひとりで環境保全団体といっても、植物を守りたい、昆虫を守りたい、野鳥を守りたいというように、各々見ている生きものが違う。例えば野鳥を守りたい団体は、野鳥が身を隠せるやぶを残そうとする。植物を守りたい団体は、定期的に草木を刈って手入れし、林の奥まで日光が入りやすくしようとする。「もの見方に相違はあっても、自然環境を守りたいという大きな目標は同じなことから、手を携え合えるはず」。そう思った金本らのNPO birthは、意見の食い違いを解消するための「浅間山を考える会」にて、自らが仲介役となり、コーディネートを行った。大学教授や地元自治体などの新たなステークホルダーも引き込んだ。各団体と一緒にモニタリング調査を行いながら合意形成を図り、約8年かけてガイドラインを完成させた。

公園を四つのゾーンに分け、それぞれの現状と、20年後、30年後にどうあるべきか、



「緊急SOS! 池の水ぜんぶ抜く大作戦」(テレビ東京)に出演し、かいばりを解説する様子(本人提供)

それを実現するための管理方法をまとめた。特に意識したのは、わかりやすさだ。イラストや写真が満載なので、子どもたちの活動にも使える。生態系を一体のものと考え、それを地域が一緒になって守っていく体制ができた、と金本は感じる。「もしも私が今ここでいなくなってしまうと、プロジェクトは脈々と受け継がれていく。そういう意味でも、人と人をつなぐ仕事にはやりがいがあります」

地域の企業や専門家との連携にも取り組んでいる。2020年6月にはリオンと共同で、都立武蔵国分寺公園にある人工池「武蔵の池」でプランクトン調査を試みた。落ち葉などにより、池に過剰に栄養分が溜まると、珪藻類などの植物プランクトンが大繁殖して水が緑色に濁り、放っておくと酸素不足が生じて生物の死滅や悪臭につながる。水質悪化を防ぎ、環境保全を進めるため、微生物の解析により水の成分を分析することが調査の狙いだ。池の水を採取し、そこに含まれる植物プランクトンの数や種類を、同社の微粒子計測技術を活用して調べた。

「私たち公園管理者が、市民に理解してもらい、みんなに納得してもらいたいと思うとき、地域の企業や大学などの専門家との連携は説得力を大きく上げることにつなが



せんげんやま 浅間山を考える会のメンバーとして金本氏が企画・執筆を主導した「都立浅間山公園保全管理ガイドライン」

り、非常に大きな意味を持ちます。専門家にとっても研究のフィールドが広がるはず。win-winの関係の中で地域連携のあり方を探っていきたいですね」

生きものと共に生きていける暮らしの環境を求めて

生物多様性という言葉が一般に使われるようになったのは、名古屋市でCOP10(生物多様性条約第10回締約国会議)が開催された2010年あたり。その頃から環境の仕事も多様になった。近年では、「市民や地域と連携した公園管理を進めるサポートをして欲しい」という自治体からの相談や、「SDGsを進めるために社内の緑地を活用したいが、どのように進めれば良いか」という相談も舞い込む。自治体や企業、市民のなかに、環境を保全していこうという空気が広がっていると実感している。

金本の夢は、都市部でも自然と共生する道をもっと切り開いていくことだ。「メダカ、カブトムシ、タガメ、ゲンゴロウ、ナマズ、タヌキなどは、日本人の暮らしの中で、人と寄り添って繁栄してきた生きものです。これらの生きものと共生していくために、多くの人々に働きかけ、共に守っていききたいですね」。